【論文】

人間の生活構造と住生活・住空間の構造
── 計画学のための基礎的考察　その４ ──

江 上　徹

The Structure of Human Life and the Structure of Dwelling Life and Dwelling Space
── A Fundamental Study for Planning Theory　Part 4 ──

Toru EGAMI

Abstruct- In spite of the intense criticism of nLDK, the greater part of houses that are made in these days are nLDK. This is a kind of a paradox, but it gives us a suggestion that nLDK has universality or possibility as a dwelling unit plan. So we study on the structure of dwelling life and dwelling space in connected with the structure of human life. Then we grasp nLDK once more in the phase of the structure of dwelling space, and clarify univerality and possibility of nLDK. The modern dwelling life or dwelling space is composed of two parts, namely communication and isolation. nLDK also has these two parts. This is the explanation of the above-mentioned paradox.

Keywords : *the structure of dwelling life , the structure of dwelling space , nLDK , communication , isolation*

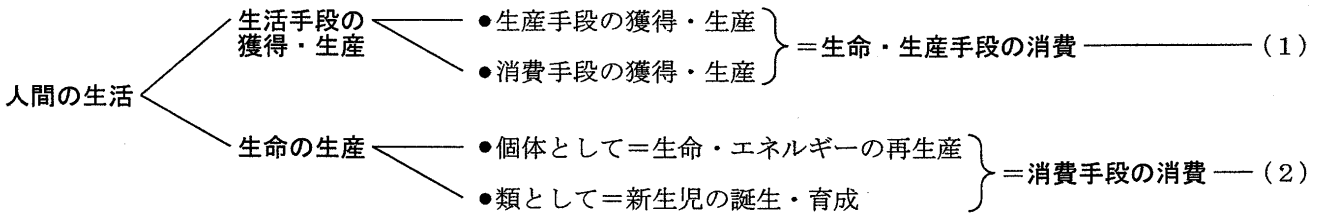
１．はじめに

本研究の「その１」[*1]で述べたように、近年、建築計画学に対する見直し論議が盛んであるが、その契機ともなり、又、中心的論議の一つとなって来たのは、「その２」[*2]、「その３」[*3]で主題として論じた、いわゆるnLDK批判であろう。今年度（2006年度）の日本建築学会大会における建築計画部門の同趣旨 ── 即ち、建築計画学見直し ── の研究協議会は「プロトタイプからプロトコルへ」と題されて行われた。そこでは直接nLDK批判が話題になった訳ではないが、このタイトルや議論の方向性は、nLDK問題や計画学の見直しを考える上で示唆に富むものであった。[*4]

nLDK批判が展開されて既に久しい。近年では事態は単なる言辞的批判を超えて進行し、〝脱nLDK〟や〝非nLDK〟を標榜する住まいづくりが、個人住宅だけでなく、公的集合住宅でも試みられ、一面ではnLDKはもはや批判や否定の対象でしかないかの如き観すらある。しかし、前報「その３」でも触れたことだが、他方では、nLDKに批判的な建築家でさえも〝やはり普通にはnLDKタイプが好まれます〟と述懐するように、[*5]建築家の設計によるものも含めて、現在つくられている住居の多くはnLDKと呼んでもよいものであるというパラドキシカルな実態がある。それは、新聞に折り込まれたマンションや戸建住宅の広告に掲載されたプランを見れば一目瞭然であろう。[*6]テレビや週刊誌といったマスメディアにおいてさえもnLDK批判がなされているのに、何故かくも盛大にそれがつくられ続けるのであろうか。この背景、要因を、単に住居・住生活が持つ保守性にだけ帰す訳にはいかないであろう。この事態は、批判の対象でしかないようなnLDKなるものに潜む、ある種の普遍性、可能性を暗示しているとも解釈できるのである。

先に、「プロトタイプからプロトコルへ」という研究協議会が示唆的であると書いた。そこでは、本研究の「その１」でも扱った法則(性)について、〝科学的に導かれた知識や法則を「真理」として提示することの有効性が社会のなかで狭まりつつある〟という問題意識が示され、プロトタイプという、言わば結論的な、フィジカルな空間の型よりも、価値基準の多様化に応じた空間を生み出すプロトコルの導出の重要性が増しつつあるという主張がなされた。本論は、プロトコルということではないが、住居の多様な具体的空間・プランを生み出す基盤として空間構造を措定し、それを住生活の構造との関連の中で考察しようとするものである。このことがnLDK

＊建築学科



図－1　人間の生活構造－1

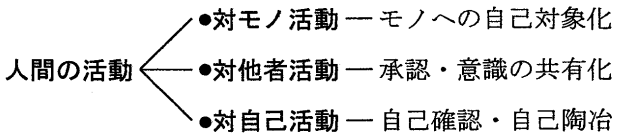
を空間構造というフェーズでとらえ直し、その可能性を明らかにすることにつながると考える。

前報の「まとめ」の終わりの方で述べたように、批判とは本来、対象をトータルに否定するものではなく、そこに含まれる肯定的側面、即ち可能性を救い出しつつ、言わばその批判的再構成を目指すべきものであろう。ただ、これまでのnLDK批判論議にはそうした性格が希薄であり、そこには旧来のプランの単純で形式的な否定や、その結果としてのオルタナティブの不分明等の問題があり、上記のパラドックスの説明も困難である。nLDKを空間構造というフェーズでとらえ直すことによって、その可能性や必然性を明らかにすれば、このパラドックスも一定解明されるであろう。

2　人間の生活及び活動の構造

人間の生活構造については、本研究の「その1　人間の生活構造と法則(性)概念の再検討」において、生産と消費の二分法を基礎とした図－1を既に提示していた。これは人間が、個体・個人としてだけでなく、類として生き続けるプロセスでは普遍的に存在する構造であると考える。上記論文では更に、人類の生活の仕方の根本的特徴として、図－1に示す生活全般にわたって、人間は他者、他の個体との共同という様式を採ることをあげた。このような共同という面に重点を置いて人類をとらえれば、ホモ・コムニス（共同する人）という言葉を用いてよいであろう。それは、ホモ・ファーベル（道具を作る人、工作人）と共に、人類を特徴づける言葉として基層に位置づけられる。

これも既にそこで述べたことだが、直立二足歩行という活動の姿勢と共同という生活様式が人類を形づくっていったと言ってよいだろう。二足歩行によって自由になった前足＝手は道具を作り出す可能性を持ち、共同という生活様式は個体どうしの意識の共有化への指向を強め、このような諸要因の絡み合いの中から、象徴化・抽象化能力や高度な記憶力、高度な自己意識が生まれ、言葉もつくり出されたのである。結果的に、個々の人間の活動の構造は、図－2に示すように、対モノ活動、対他者活動、対自己活動という三層で構成されることになる。

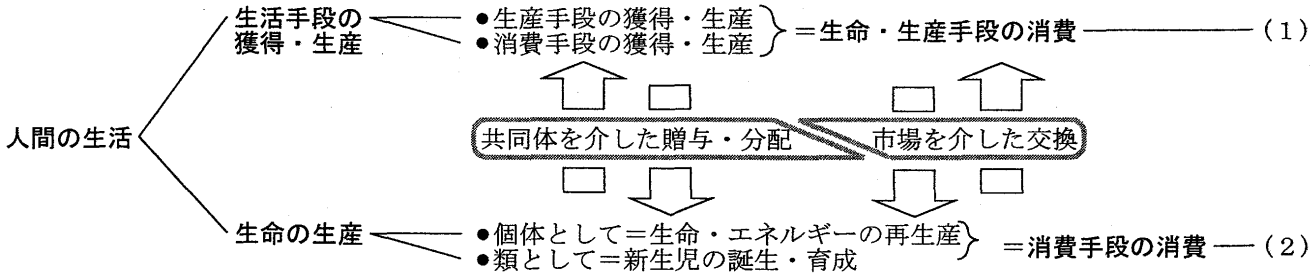


図－2　人間の活動の構造

さて、図－1に示す構造をとりつつ、人々は共同で生活手段を獲得したり、生産したりし、又、共同でそれらを消費し、生命・エネルギーの生産・再生産を行うわけだが、この共同性は無限の範囲で成立するのではない。そこには自ずと共同性の広がりの限界、範囲があり、その共同性ないし、共同活動に集う人々の単位性は一律、一様ではなく、活動内容に応じて変化する可能性が高い。例えば、原始的な狩猟・採集の生活を例にして考えると分かり易いだろう。今日の狩猟採集民はバンドと呼ばれる数十人の単位で暮らしているが、原始時代も同様であったろう。しかし、バンド内の活動の共同性が常にこの範囲で成立するわけではない。狩猟という活動はバンド内でそれが可能な成人男性だけで組織される共同活動である。狩猟という生活手段の獲得活動の共同性は厳密に言えばこの範囲でしか成立しない。[*7]採集活動は女性が主体となるであろうが、子どもや男性の参加も含めて、そこでは更に多様な範囲、単位での共同性が成立していただろう。

消費生活においても同様である。食事等は、バンド単位の共同性が成立する局面が多いと考えられるが、それでも授乳や小さい子どもの世話は母子という単位やそこに母の姉妹が加わった集団の単位性が顕在化する局面もあったろうし、男女の性関係は更に小さな共同性の単位を形成する可能性を秘めている。排泄は言うまでもなく、基本的に個体単位である。

共同性の範囲、そこに集う人々の単位性の問題は、上に述べて来た集団やその内部だけのことではない。この集団の外には類似の、或いは相当異なった様々な人間集団が存在するのである。本研究「その1」で述べたように、人間の生活の基本はその生命の維持・発展であり、そのために図－1に示す生産や消費に分類される様々な活動を行わねばならない。人類の歴史は一言で表現すればこれらの活動の



図－3　人間の生活構造－2

自由度の増大の歴史であると言えよう。人々は言わば自由を求めて生きて来たのである。人間の活動の自由度にとって、生活手段の有無や内容は大きな意味を持っている。食事という活動の自由は、食べものという手段の有無・内容に大きく左右される。先述のバンドを例にとれば、成人男性が獲って来た肉や女性が採って来た植物性食料が、バンドの構成メンバーに分配されることで、彼らは食事という活動の自由を得ることができる。こうしたバンド内での生活手段の分配や贈与、つまりその移動は、それを受ける側からすれば、活動の自由度の増大につながるのである。後に述べるように、バンド内のメンバーは、大きく異なった文化やその下で生きてきた他者と接する機会は少なく、現代と比べるとよく似た人格の人々であったと考えられるが、それでも身体的、精神的な個性があり、適性や能力を自覚し、又、相互に意識し合い、生産や消費の両面で相補性を活かした集団はより永く生き続けただろうし、発展する可能性があった。この相補性は、贈与や分配の相互性としても実現されていただろう。

ただ、上に述べたように、この集団の外には別の集団が存在するのであり、生活手段の移動は集団の枠を超え、各集団間でなされる可能性があるのである。この生活手段の移動には様々な方法があり得る。例えば、集団内部のメンバー間での贈与・分配やその相互性に準じた、集団間での贈与・返礼もあるだろうし、それとは逆の暴力的な略奪という方法もあるだろう。或いは、長期にわたって集団間に力の差がある場合には、収奪・貢ぎという形をとるかも知れない。しかし、より一般的な、そして歴史的に発展して来た方法は交換であろう。交換による生活手段の移動の広がりによって、人々は大きな活動の自由度を得るようになって来た。共同性をもって生活して来た基本的な集団の枠を超え、他の集団との間で生活手段の移動が行われるようになると、その範囲なりでの、言わば薄められた共同性が成立することとなる。略奪という関係に共同性が存在するかについては疑問であるが、収奪・貢ぎには支配と保護という共同性があり、交換についても、それが公正かつ非暴力的に行われるためには、交換の場である市場に一定のルールが必要であり、それを相互に認めるという形での共同性が成立する。

人間の生活の自由を支えてくれる生活手段は、換言すれば富と呼んでもよいだろう。このような富の移動を含めた形で人間の生活構造を図示すれば、図－3のようになる。この図に関しては二点注意をしておくべきだろう。これまでの論述では生活手段＝モノの移動のみに言及して来たが、移動するのはモノだけではない。労働力や出生力としてのヒトも実は移動するのである。ヒト、或いは能力としてのヒトの移動に、交換や贈与・分配という言葉を使うことの是非の問題は残るが、ヒトも移動することで生活手段の獲得・生産、生命の生産・再生産という生活の両輪は動いていく。ヒトの移動が持つ意味の大きさは原始的な社会における出生力としての女性の移動の重要性や、今日における安い労働力のグローバルな移動が持つ影響力の大きさ等を考えれば分かることであろう。

又、ここではバンドや集団ではなく、共同体という言葉を市場との対比で用いている。バンドも集団も共同体も広い意味では社会と言ってよいものである。しかし、共同体は言わば特殊な社会であり、市場の力が増大した今日では、共同体という言葉を社会一般と区別されたものとして使う傾向がある。ただ、そうした傾向があるにもかかわらず、両者の区分はあいまいな所がある。ここでは、この両者を明瞭に分ける必要がある場合には、上に述べて来た生活手段＝富の移動の問題と絡ませ、富の移動が主として贈与や分配によってなされる領域、人間集団を共同体とし、富の移動が主として交換によってなされる領域、人間集団を社会とする。こうした社会や共同体は、次節で述べる公や共の概念とも関連するものである。

3　住生活・住空間の構造とゾーニング

かつて土居義岳は、ル・コルビュジェの〝住宅は住むための機械である〟という言葉を限りなくトートロジー（同語反復）に近いと論じた。[*8] 住生活とは

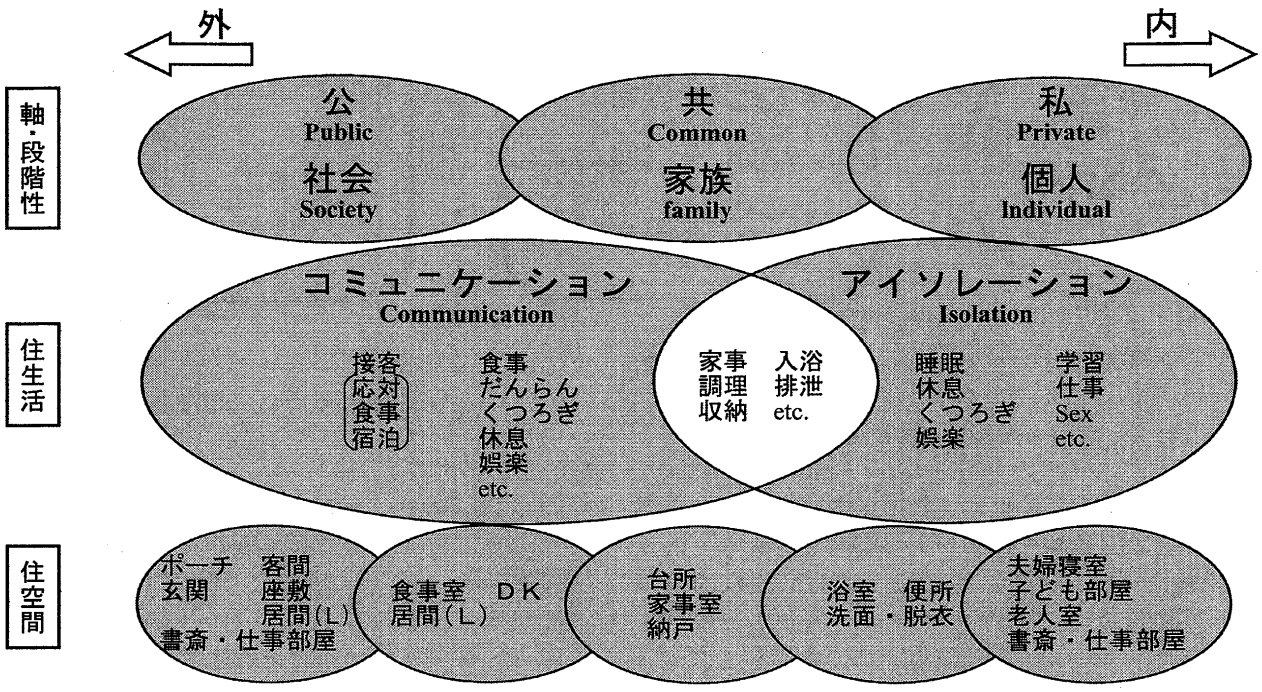
何か、といった議論もこうしたトートロジーに陥り易い。例えば〝住居とは住生活の場である〟という言い方や〝住生活とは住居でなされる生活のことである〟という言い方は、各々独立した命題として聞けば別のことのように思えるが、実は同じことを言っているのであり、もし同一の辞書の〝住居〟や〝住生活〟という見出しの説明文としてそれらがあるとすればトートロジーとなり、余り意味をなさないということになる。本研究で構造論や構造的認識という方法を採るのは、そうしたトートロジーを避けるためでもある。

図－1や図－3と関連させて住生活とは何かを定義すると、広義にはそれは生命の生産・再生産の生活であるということである。そして同様に広義にはこの生命の生産・再生産に属する生活の場が住居であると言える。この生活には食事や睡眠、休息だけではなく、性生活や出産、育児・育成・教育、学習、家事、治療・看護・介護等々が含まれる。近代社会ではその一部は学校や幼稚園や病院等の施設に担われるようになるが、このような施設の空間に住居的性格が必要とされる根拠は、元々それが住生活であったからである。又、図－1、図－3は人間・人類の生にとっては、(1)生活手段の獲得・生産と(2)生命の生産・再生産の両方が必要であり、その意味では(1)と(2)は対等であることを示している。近代社会では(1)の生産活動、労働が(2)よりも重視され、価値が高いかのようにイメージされて来たが、住生活の要素である家事労働・育児等と生産労働とは対等の価値を有しているのである。このことは余り意識されないし、議論にもならないが、住生活の意味を考える時、存外に大きな問題であるように思われる。

前節で共同性やそこに集う人間集団の範囲、単位性について言及したが、住生活は人類史の初期段階では、母系の消費小集団という単位・形態をとりながら、バンド等のより大きな集団の中でなされていたと考えられる。移動をくり返す狩猟・採集の生活の中では、この母系消費小集団は今日の家族ほどの明瞭な単位性は持たなかったであろう。だが、農耕の発明・発展に伴い、定住という生活様式が広がると、この消費生活＝生命の生産・再生産の単位は明瞭性を増す。その形態や内容は、農業の具体的形態、方法によって異なっていたであろうが、そこでは血縁・婚姻関係を基礎とした家族が形成されたと考えられる。[*9]この家族は確かに一面では消費生活の単位であったが、他方では農耕や家畜飼育といった生活手段の生産の単位でもあった。それ故、上記の母系消費小集団以上の自立性を持っていた。しかし、各家族が全く独立して生活していたのではない。家族の自立性、独立性が強かったとされるゲルマン的形態も含め、農業生産や住居その他の環境形成上の必要労働が、個々の家族単位での対応能力を超えることもあり、家族が複数集まった地縁集団、言わばムラがつくられた。つまり各家族の外側にはより大きな共同体ないし社会が存在するのである。産業革命以降の近代化により、生活手段の生産の様式は大きく変わり、生命の生産・再生産の様式も大きく変わった。この変化を一言で言えば、多くの家族が生産の単位でもあるという性格を失い、消費生活の単位という性格を強めることになったということである。それでも各家族の外側により大きな社会が存在するという構図は変わらず、各家族及びその構成メンバーはその中で生活をしているのである。

こうした構図が、住生活やその場である住居、住空間に内－外という空間の軸ないし構造を与える。又、家族にせよ、共同体や社会にせよ、その最小の構成要素は個人であり、上記の内－外という空間の軸にそって、個人－家族－社会という単位性、段階性が形成される。〝個〟という概念と〝私〟という概念については多様な論議があり、確かに両者は異なった意味内容を持つものであり、〝公〟や〝共〟に関しても様々な論議があることは承知しているが、本論ではこの点に関して詳述することは避け、個人－家族－社会という軸は概ね私－共－公という軸に重なっていることを指摘しておくだけにとどめたい。この私－共－公に関しては別稿で論じることになるだろう。ただ、注意すべきはこうした軸は単に方向性を持っているだけではなく、上記のように、段階性、単位性を持っているということである。即ち、個人単位・私的住生活とそのための領域ないしゾーン、家族単位・共的住生活とそのための領域ないしゾーン、社会単位・公的住生活とそのための領域ないしゾーンという具合に、住生活や住空間が構造化されるのである。

私生活の場という性格を色濃くした近代住居にあっては、公的住生活という言葉はなじめないかも知れないが、これは平たく言えば接客のことである。動物の巣と比較した時の人間の住居の本質的特徴として、この接客、つまり家族以外の他の個体・個人を住居に迎え入れることがあげられる。動物にあっては、自分の巣はおろか、テリトリーに他の個体が入ることさえ嫌うのである。鳥の巣等に典型的にみられることだが、もう一点両者の本質的違いがある。鳥の巣は基本的に新しい生命の生産の場、つまり産卵、抱卵、育雛の場であり、親鳥の生命の再生産の場という性格が希薄であるが、人間の住居は親も含めた全メンバーの住生活の場である。人間の住居のこのような特徴は、人間が本質的に共同的存在であ



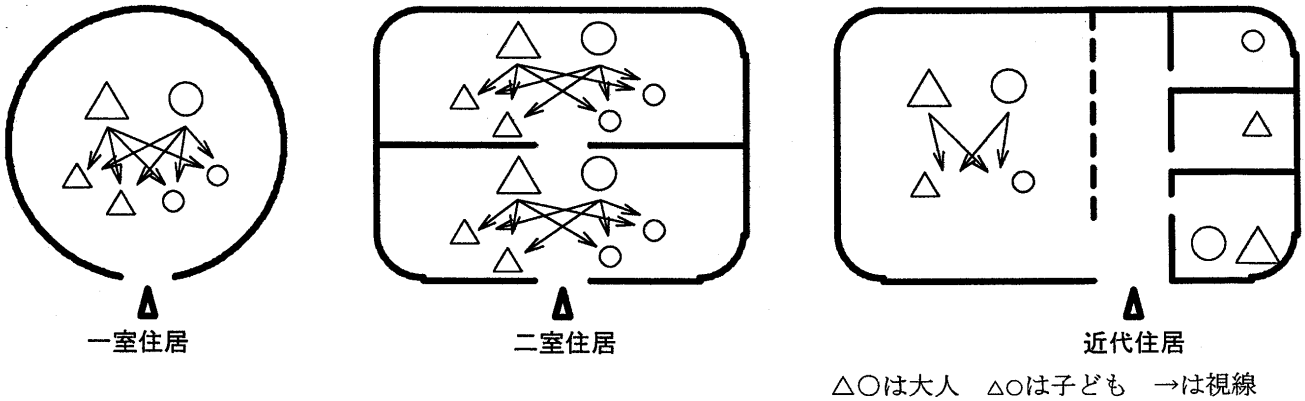
図－4　住生活・住空間の構造とゾーニング

ることを物語るものである。

さて、上に述べて来た生活や空間の軸は、消費生活、広義の住生活とその単位を端緒にして考えたため、内－外という順序で書いたが、今日、一般的には公－私、公－共－私という書き方が普通であり、以下では基本的にこの順序で書くこととする。公－共－私の各々に対応する典型的住生活行為をあげるとすれば、公では接客、共では食事、だんらん、くつろぎ、娯楽等、私では睡眠、性生活、学習、仕事、（一人での）くつろぎ、（一人での）娯楽等である。それに対応した典型的空間、部屋をあげるとすれば、公では客間、リビングルーム（以下L）等、共では食事室やDK、L等、私では寝室、子ども部屋、老人室等である。

さて、上に述べて来た外－内、公－共－私に構造化された住生活や住空間、ゾーンを図示すれば図－4のようになる。既に述べたように、人間の生にとってこの住生活が持つ本質的意味は、生命の生産・再生産である。図－1や3ではそれを〝個体として〟と〝類として〟という二つの側面に分けている。具体的な家族の住生活を例にとって説明すれば、個体としてというのは親も含めた家族成員の食事、排泄、睡眠、休息、娯楽等であり、類としてというのは出産、子育てである。先に鳥の巣は基本的に新しい生命の生産の場であると書いたが、人間の住居にあってもそれは本質的な機能なのである。近代を家族－市民社会－国家という図式でとらえたヘーゲルは「法の哲学」の中で家族を論じているが、その重要な役割として子どもを産み育て、一人前にして社会に送り出すことをあげている。住居は住生活の場や器と呼ばれるが、その時〝住生活〟という言葉でイメージされているのは、上述した食事や睡眠、休息、娯楽、入浴、学習等々の具体的、個別的な生活行為であることが一般的である。住生活と住空間の対応と言った時も同様であろう。確かにそうした面は大切ではあるが、新しい生命の生産という住生活の本質からすれば、一方で住居はそうした日々の諸行為の積み重ね、長期間の居住を通しての子どもの自己形成の場という意味も実に大きい。

こうした新生児や子どもの自己形成のプロセスに関しては心理学者浜田寿美男氏の「「私」とは何か」を始めとする長年の研究に詳しく論じられている。それによると、新生児、子どもが自己を形成していく第一歩は、既に言語を軸としたシンボル体系に基づく意味世界を持っている身近な具体的他者、即ち典型的には母親や父親等とのコミュニケーションであり、それを介したこの意味世界の敷き写しである。[*10] コミュニケーションとは意識の共有を目指した交流、相互活動である。このような敷き写しという基礎的プロセスがあって初めて、子どもは自己形成へ向けての次のステップへと進むことが出来る。ただ、コミュニケーションの多くが上記の段階や身近にいる具体的他者とのそれという段階にとどまれば、具体的他者、身近な他者とよく似た個性の人格が形成



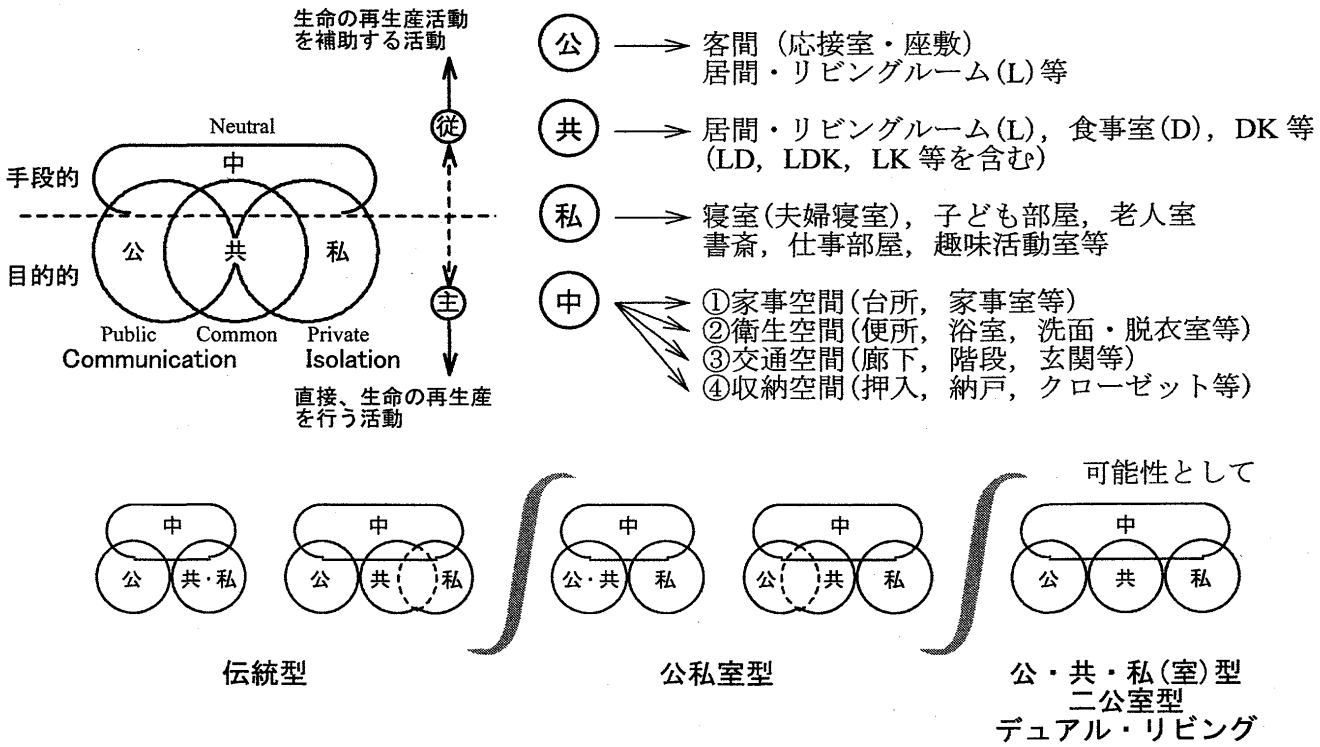
図－5　前近代の住居と近代住居の対比

されるだろう。これは前近代の社会ではよくある話である。より多様な個性の人格が形成されるというのが近代だが、そのためには、言わば抽象的他者 ── 本の著者やCDのアーティスト等 ── とのコミュニケーションが必要となる。このコミュニケーションの自由な展開のためには、具体的他者からのアイソレーション（具体的他者から離れて一人になること）が必要となる。家族や客とのコミュニケーションの場であるLやD・DKといった公・共の部屋と、夫婦寝室や子ども部屋等の私室から成る近代住居はこのような住生活に対応したものと言える。図－5は、前近代の一室住居、二室住居と近代住居との上記のような対比を示すものである。

上に述べたように、近代住居は、具体的他者とのコミュニケーションのための空間と、抽象的他者との自由なコミュニケーションのためのアイソレーション空間とから成っている。言わゆるnLDKも基本的に同様の構成を採っている。旺盛なnLDK批判にもかかわらず、nLDKがつくられ続けるというパラドックスの背景には、こうした近代社会に対応した近代住居の普遍的構成、空間構造があるのである。コミュニケーションとの関連でもう一点指摘しておきたいのは、今日に特徴的な承認、自己確認の困難性の問題である。高度な自己意識を持つ人間は、飲食だけでは生きていけない。自分がこの世界に確かに存在することを認識しながらでないと生きることは難しい。他者による承認は、自己の存在確認の主要な方法である。共同体が大きな位置を占めていた前近代の社会では、その中で承認はごく自然に成立していた。しかし市場的関係が拡大し、共同体が衰微しつつある近代社会にあっては、それが困難になって来た。最後の共同体とも言うべき家族までもが危機を迎えている今日ではこの承認、自己確認の問題は更に大きな意味を持つようになっている。

先にコミュニケーションとは意識の共有を目指した交流、相互活動であると書いた。実はこの意識の共有は一面では上記の承認、自己確認と重なるものである。他者と自己の意識の共有という状態は、多くの場合、自己の意識が、延いては自分という存在が他者に認められているという状態なのである。それ故、住居における具体的他者とのコミュニケーション、アイソレーションを介した抽象的他者とのコミュニケーションは、承認、自己確認という意味を持つものであると言える。抽象的他者とのコミュニケーションの場合、活動の相互性があるかという疑問もあるだろうが、本の著者やCDのアーティスト等は作品によって鑑賞者に働きかけを行っており、相互性は成立していると考える。住居は寝食やくつろぎ、だんらん、学習等々の具体的、個別的住生活の場であることは確かだが、ここに述べて来たように、長期間を通しての子どもの自己形成の場、或いは家族員、同居者の承認、自己確認の場という意味も実に大きい。そして、nLDKは空間構造としてとらえれば、具体的他者とのコミュニケーションの場とアイソレーションの場から成っており、それを通した承認、自己確認、自己形成の場として一定の対応力を持っているのである。ただ、そこでは夫婦に関しては一つの寝室があてられており、完全なアイソレーションが成立しないという限界はある。この点については更なる考察を要するであろう。又、具体的他者と一口で言っても、家族員や同居者とそれ以外の人とでは全く同列に扱えない面もあり、この点でも検討の余地はある。[*11]

更に、多面的で複雑な住生活には、コミュニケーションとアイソレーション、或いは公－共－私といった空間の軸、空間構造だけではとらえられない面もある。例えば調理・後片づけ、洗濯等の家事、整理・収納、移動等々である。入浴や排泄はプライバシーを必要とし、私や個に属する住生活行為であるが、空間としては日本では共用が普通である。こうした住生活やその場を、上記の空間軸に位置付けにくいものとしてまとめ、ニュートラル、中という言



図－6　住居の空間構造とその歴史的変化

葉で表すとすれば、住空間全体は公－共－私と中という４つのゾーン，領域の構造として示すことができる。又、この〃中〃でなされる住生活は概ね、生命の生産・再生産との関連で言えば、より間接的、手段的と位置付けることができよう。例えば、食事は直接的に生命の再生産を目的としたものだが、調理や後片付けはその食事のための生活行為であり、生命の再生産にとってはより間接的、手段的と言える。睡眠は直接、生命の再生産を目的として行われるが、寝室への移動は就寝のためであり、生命の再生産にとっては間接的、手段的である。この生命の生産・再生産活動に対する関係の直接性、目的性を主、間接性、手段性を従としてとらえるならば、公・共・私のゾーン、領域は主空間であり、中のゾーン、領域は従空間であると言えるだろう。

図－６の上部は、このような考え方に基づいて住空間の構造を図示したものであり、その下部はそれを利用して日本の住居の空間構造の歴史的変化を説明したものである。伝統型では、公即ち接客・対社会コミュニケーションの領域が比較的明瞭であり、共と私の区分はあいまいである。公私室型 ── モダン・リビングもnLDKもここに含まれる ── にあっては逆に私の領域が明瞭であり、公と共は重なったり連続したりしている。住居の規模や密度とも関係するであろうが、先述した具体的他者の非一様性に着目するならば、公－共－私が各々適切に区分された型も可能性としてあるだろう。ただ、そこでも大きくはコミュニケーション領域とアイソレーション領域から住居が構成されているという点は同様である。

4　まとめ

「はじめに」で述べたように、今日の建築計画学見直し論議の契機となり、中心的論議の一つとなって来たのは、nLDKに対する批判である。[*12] テレビや週刊誌といったマスメディアにおいてさえnLDK批判がなされ、公的集合住宅でも〃脱nLDK〃や〃非nLDK〃を標榜する住まいづくりが試みられ、現代では、nLDKはもはや批判や否定の対象でしかないかの如き観すらある。所が一方では、nLDKに批判的な建築家でさえ〃普通にはnLDKが好まれます〃と述懐するような現実があり、建築家の設計によるものも含めて、現在つくられている住居の多くはnLDと呼んでよいものであるという、パラドキシカルな実態がある。これは、批判・否定の対象でしかないようなnLDKなるものに潜む、ある種の普遍性、可能性を暗示しているとも解釈される。批判とは本来的に、対象に含まれる肯定的側面や可能性を救い出しつつ、言わばその批判的再構成を目指すべきものであろう。

本論では以上のような問題意識から、住居の多様な具体的空間・プランを生み出す基盤として空間構

造を措定し、それを住生活の構造との関連の中で考察し、更にnLDKを空間構造というフェーズでとらえなおすことでその普遍性、可能性を明らかにし、上記のパラドックスの解釈を試みた。

人間の生活は、生活手段の獲得・生産と生命の生産・再生産の二側面から成るが、その両面で共同の活動が行われるという点に本質的特徴がある。この共同性が、人間の生活の中に様々なレベルの集団を形成させることとなる。住生活とは広義にとらえれば上記の生活の二側面の後者、即ち生命の生産・再生産の活動、消費手段の消費活動であり、その活動の場が広義の住居・住空間である。この活動を基本的に行う単位集団は、母系消費小集団から家族へと歴史的に変化して来たと考えられるが、この集団は単独で生活していくことはできず、その外側の様々な集団と関係しながら存続している。それ故、そこには外－内という空間の軸が必然的に生まれる。又、社会や共同体等も含め、諸集団を構成する最小単位は個人であり、この外－内という空間軸は、社会－家族－個人、或いは公－共－私という軸に重なる。結果として住空間は大きくとらえれば、公と共と私のゾーン・領域で構成されることとなる。

住生活と言えば、食事や就寝等の具体的生活行為を先ずイメージするが、住生活の意味はそこにだけあるのではない。住生活には、長期間の居住を通しての子どもの自己形成や大人も含めた承認、自己確認という意味もある。これらも含めて住生活を構造的にとらえれば、それは具体的他者とのコミュニケーションと、抽象的他者とのコミュニケーションを行うためのアイソレーションとから成ると言える。ハンナ・アーレントの公私論に拠れば、人が生きていく上ではこのコミュニケーションとアイソレーションの両方が必要ということになる。[*13]近代住居は基本的にはこの要請に対応できている。nLDKもnというアイソレーション空間とLDKというコミュニケーション空間から成っており、上記の要請に応えている。このことが、旺盛なnLDK批判にもかかわらずそれがつくり続けられている背景にある。しかし、そこには夫婦に一つの寝室があてられていることによるアイソレーションの不十分さや、具体的他者とのコミュニケーションの非一様性への対応の可能性等、今後の空間構造の変化の要因も存在している。

＊１　「人間の生活構造と法則(性)概念の再検討　── 計画学のための基礎的考察　その１ ──」
九州産業大学工学部研究報告　第40号、2003年

＊２　「nLDK批判をめぐる諸理念・諸議論の系統的整理：前編　── 計画学のための基礎的考察　その２ ──」
九州産業大学工学部研究報告　第41号、2004年

＊３　「nLDK批判をめぐる諸理念・諸議論の系統的整理：後編　── 計画学のための基礎的考察　その３ ──」
九州産業大学工学部研究報告　第42号、2005年

＊４　「プロトタイプからプロトコルへ　── 建築計画学のあり方を展望する ──」
日本建築学会建築計画委員会、2006年

＊５　INAX住宅フォーラム１「nLDKシステムをめぐって」における西沢立衛氏の発言。
「10＋1」№18、INAX出版、1999年

＊６　新聞折り込み広告掲載プランの分析については、「現代における家族・個人・社会の変容と住まいに関する研究　── 少子高齢化・個人化の中の家族居住とコミュニケーションの再構築 ──」（平成13～14年度科学研究費補助金　基盤研究B研究成果報告書、研究代表者上和田茂、2003年）の第２部第５章を参照のこと。

＊７　多くの文化人類学的調査レポートが指摘しているように、獲物の分配の範囲は、狩猟に参加した人だけに限定されるのではない。より広い共同性が存在している。ただ、分配という活動をリードするのは、狩猟で主たる働きをした人や、狩猟の道具の所有者であったりする。

＊８　「新建築住宅特集」1996年2月号

＊９　母系消費小集団から個別家族の形成への歴史に関しては、拙者「住まいの近代化と家族(１)」（日本建築学会建築計画委員会「住まいの近代化論」所載、1989年）を参照のこと。

＊10　「「私」とは何か」浜田寿美男、講談社、1999年。
自立した個として自らの意志でこの世界に生まれて来るわけではない赤ン坊にとって、母親や父親等の家族の持つ意味は大きい。近年は個人化論等の影響もあり、〃ライフスタイルとしての家族〃といった言葉で、家族さえも自由な選択が可能であるかの如く説かれたりする。しかし、この自由には大きな限界がある。ヴィルヘルム・F・シュルツは次のように述べている。〃……個体である人間は、すでに生まれた時から感覚的諸感情の、それゆえ諸表象、諸概念、意志表出の、一つの規定された世界にはいる。したがってまた彼は、人格世界の特定の成員ならびに物象世界の一定の部分に、他のすべてのものに先だって、より多様に接触し、より内面的に結合する〃（「シュルツとマルクス」植村邦彦、新評論、1990年）
人は、生まれ出た世界の身近な具体的他者、即ち父や母を始めとする家族ないし家族的な存在や、その住居を始めとする物的存在に、他のすべてのものに先立って、より多様に接触し、より内面的に結合せざるを得ない。そして、そうした人や物的存在とより長い時間関係するのである。このことが家族間コミュニケーション、即ちだんらんと、対社会コミュニケーション、即ち接客との違いにも結びつく。

＊11　上記の＊10の説明を参照のこと。

＊12　鈴木成文氏は近著「五－Ｃ型白書」（住まいの図書館出版局、2006年）で次のように指摘している。〃近年、建築計画学に対する批判の言辞をしばしば耳にしますが、とくに建築家や設計者からの場合は「nLDK」の批判からそれが建築計画学非難に短絡しているものがあり、いずれも計画学研究の内容も蓄積も識らずに、自分の思いこみで論じられる例がほとんどです〃

＊13　「人間の条件」ハンナ・アレント著、志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年